

栽培漁業センターの種苗生産事業（概要）

島袋新功、藤本 裕、金城武光、前田訓次

栽培漁業センターは、昭和58年度に開所し、本年度からミナミクロダイ（チン）、ハマフエフキ（タマン）、タイワンガザミ（チヌガニ）、シラヒゲウニ（ガシチャー）の種苗生産を行ない、その結果を下表に示した。生産した種苗は、放流または養殖用に出荷した。

栽培漁業センターの昭和59年度種苗生産事業結果

対象種	生産期間(月)	生産数	全長mm	飼料種類	備考
ミナミクロダイ	3～4	72千尾	10～25	ワムシ、配合飼料	養殖種苗
ハマフエフキ	4～7	34千尾	11～20	マガキ幼生、ワムシ、配合飼料	中間育成 放流種苗
タイワンガザミ	5～7	308千尾	2～4	ワムシ、アルテミア、アサリ	中間育成 放流種苗
シラヒゲウニ	10～12	3千個	1～4	浮遊珪藻、付着	放流種苗

ミナミクロダイの種苗生産は、3月から1㎡と10㎡水槽のべ13面で、ワムシ、配合飼料等を投餌して、ふ化仔魚を飼育した。4月下旬までに全長10～25mmに生長した稚魚は、養殖用種苗として総数72千尾を出荷した。飼育期間中の平均生残率は9.2%、1㎡当りの平均生産密度は2、3千尾であった。

ハマフエフキの種苗生産は、4～7月まで1㎡と10㎡水槽でふ化仔魚の飼育を行なった。飼料は魚の大きさに合わせて、マガキ幼生、ワムシ、配合飼料等を順に投餌した。飼育魚は全長約15mmに生長した段階で、陸上水槽から中間育成用の海上網生簀に沖出した。ふ化仔魚から沖出しまでの生残率は0.5～8.2%、平均1.8%、生産密度は30～200尾/㎡で沖出しに供した尾数は33,000尾であった。中間育成は塩屋湾の網生簀で、配合飼料を投餌して行なった。全長約8cmに生長した飼育魚は、9月27日と11月1日に全数に標識を着けて屋我地島東側の羽地外海で放流した。放流尾数は3,860尾、中間育成期間の生残率は13.1%と低い結果であった。

タイワンガザミの種苗生産は、5～7月に屋外50㎡水槽4面で、ワムシ、アルテミア幼生、アサリのミンチ肉等を投餌して行なった。飼育期間中の生残率は2.3～18.6%、平均6.0%、生産密度は0.6～2.0千尾/㎡、平均1.7千尾/㎡で、合計308千尾の稚ガニを生産した。

シラヒゲウニは、9月から暗室内の0.5と1㎡水槽で、浮遊珪藻 *Chaetoceros gracilis* を投餌して、ウニの浮遊幼生を飼育した結果、変態前の8腕後期幼生を約60万個生産した。後期幼生は、あらかじめ付着器に付着珪藻を培養した屋外8㎡水槽3面に移し、稚ウニに変態させた。付着から1.5カ月後のウニの生残数は3千個、殻径1～4mmで、変態から稚ウニの生残率が非常に低かった。

種苗生産事業の詳細については、別途に「栽培漁業センター事業報告書」を予定しているため、ここでは概要について記述した。また、ハマフエフキとタイワンガザミについては、「昭和59年度栽培漁業技術開発事業調査報告書（沖水試資料No.83）」ですでに報告した。